

2024年度 非認知能力向上事業 検証会議要旨

【ファシリテーターから】

- 学校内外で経験したことが演劇ワークショップの中に反映されている。
- 「子どもたちに安易に成功体験をさせないこと」→自己肯定感や自己効力感を高めながらも自分の課題に気づくことや自分の認識と他者の認識が違うことを確認する機会をつくることが大切。
- 全校実施して感じたのは、「観る力」が成長している。特に、想像しながら他者を理解しながら観る力が高い。
- 子どもたちが何をやりたいのかを受け止めた上で、「それちょっとわからない。他者には伝わらない」ということなど伝えていく。そして大人が答えをもたない。わからないといった後に、「どうやったらわかるの」と一緒に悩む、一緒に考える、一緒に喜ぶことが大切。

【教職員から】

- ファシリテーターの声かけで、「そうだね」「こういう風にみえたね」とあるように、教員も不規則な発言や好ましくない行動をひっぱりあげて、活動にもっていく機転や心の余裕を持つこと。受け入れてもらうと、グループの中でも役割ができたり、参加できた、最後までやり切れたと思えたり、やりたいなという気持ちにつながっていく。
- 次年度からのとよおか教育プランの「在りたい自分」を創造することにもつながる取組。クラス分けの時期に、保護者からあの子とは離してくれなどの要望がある。根本的な解決にはならず、どんな学級にしたいのか、どのようにしたいのかを示さなければならない。グループで気が合う子ばかりでない中でみんなが集団で過ごしやすいようにしていく力を身につけさせることに効果があるように思う。

【学識者から】

- 私のある学校の記録として、強いサッカーのチームの試合を見ているようだとする。子どもたちが互いに言葉だけではなくコミュニケーションをとりながら、どうすれば面白くなるのかと楽しんでいる、ゲームを楽しんでいるサッカーチームに見えた。なぜそのようなことが起きたのかと考えたときに、ワークショップ単発でなく、その間を先生方がつないてくださって学校自体が大きく変化しているように見えた。

非認知能力というのは個人の能力であると同時に集団の能力、組織の能力でもある。組織が、例えばこのことだったら私たちもできるという自信を持ったり、ここは上手くいっていないのはなぜだろうと個人を責めるのではなく、みんなの特徴を生かしながらいわれていることが豊岡の学校の現場で見られた。